

かなでほんちゆうしんぐら

## 仮名手本忠臣蔵

### 〔解説〕

寛延元年（一七四八）八月、竹本座初演。竹田出雲・三好松洛（しょうらく）・並木千柳（なみきせんりゆう）の合作。八月十四日から十一月まで打ち続ける程、当初から人気が高かった。言うまでもなく赤穂浪士の仇討ちを脚色したもので、同じ題材を扱った数多くの先行作品の集大成であり、「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」と共に三大浄瑠璃の一つに数えられている。

元禄十四年（一七〇一）三月十四日、勅使響応の際、江戸城松の廊下で、浅野内匠頭が吉良上野介を刃傷に及んだ事件から、元禄十五年十二月十四日の討入りまでを一年に凝縮し、春夏秋冬に配列したのも心憎い脚色である。時代を足利時代に、場所を鎌倉に置き換え、登場人物も、浅野内匠頭を塩治（えんや）判官、吉良上野介を高師直（もろのう）、大石内蔵助を大星由良之助（ゆらのすけ）などと、太平記の世界をとってつけており、また、それは幕府の検閲を逃れるための手段でもあった。

本筋の義士劇の他に、若狭之助、本蔵、勘平、天河屋（あまかわや）の件が発生し、世話場・道行等を交え、もっぱら首尾を整えている。討入りの事実と戯曲的内容を巧妙に一致させた名曲である。

〔あらすじ〕

## 《大序》

暦応元年（一三三八）二月下旬、鶴ヶ丘八幡宮の造営が成就したので、足利將軍尊氏の弟・直義は、兄の代参として鎌倉へ下向、新田義貞が討死の時に着用していた兜を宝蔵に納めることになった。塩冶判官の妻、顔世が召され、四十七の兜のうちより、義貞のものを見分ける。

直義と、このたびの響応役、塩冶判官・桃井若狭之助は、兜を宝蔵に納めに行く。後に残った指南役、高師直は、艶書を渡して顔世を口説くが、戻ってきた若狭之助の機転により、顔世はその場を逃れることができた。怒った師直は若狭之助を罵倒、若狭之助はかろうじて憤りを抑える。

## 《二段目》

桃井家の奥座敷。若狭之助は、家老・加古川本蔵に、昨日の無念を晴らすため、明日は師直を討つ決心だとうち明ける。老功な本蔵は逆らわず、縁先の松の枝を伐って「まっこの通りさっぱりと遊ばせ」と述べる。

## 《三段目》

正七つ時（午前四時）の登城に先がけ、西の御門で師直に追いついた本蔵は、進物を山と並べて首尾よく師直の機嫌を取り結ぶ。師直の勧めで本蔵も門内に入る。やや遅れて、塩冶判官が早野勘平を供に登城。腰元おかるは、顔世から師直への文箱を届けに来る。勘平は判官から師直に渡せばよいと、おかるを待たせて奥に入る。

「おのれ師直、真二つ」と意氣ごむ若狭之助の前に現れた師直は、前日とはうって変わって低姿勢。金が言わせた追従とは夢にも知らぬ若狭之助は、すっかり拍子抜けして、刀を抜くことができなかった。

さて、判官が顔世からの文箱を師直に手渡すと、中には新古今の歌。師直は恋のかなわぬしるしと悟り、判官に散々当てこすりを言う。判官は腹にすえかね、師直に斬りつけてしまう。判官を抱きとめたのは、次の間に控えていた本蔵であった。

館の騒動に、勘平は急ぎ裏門へ。判官が閉門を仰せつけられ、網乗物にて帰ったと聞き、動顛する。おかるとの逢瀬を楽しんで、主人の大事に居合わせなかったことを恥じ、切腹しようとするが、おかるに止められ、おかるの在所、山崎へと落ちてゆく。

#### 《四段目》

閉門中の判官のもとへ、上使、石堂馬之丞と薬師寺次郎左衛門が「国郡を没収し、切腹」との上意を伝えに来る。かねて覚悟していた判官が、刀を腹へ突き立てたところへ、国家老、大星由良之助が駆けつける。判官は「この九寸五分は汝へ形見、我が鬱憤を晴らさせよ」と息絶える。家来一同は、亡骸を菩提寺光明寺へと送り、斧九太夫ら不忠の者を除いて仇討ちの盟約をして城を明け渡す。

#### 《五段目》

山崎で獵師をしながら帰参の時機を待っていた勘平は、夜の街道筋で朋輩千崎弥五郎に出会い、主君の石塔建

立の計画を聞き、御用金を調える事を約して別れた。

百姓与市兵衛は娘おかるを祇園へ売る約束をして得た半金五十両を懐にしての帰途、斧九太夫の倅、定九郎に金を奪われ、刺し殺される。そこに猪が通りかかり、それを狙った鉄砲が定九郎のあばらを買いた。勘平は猪を打ちとめたと暗がりを手で探るとそれは人間であった。手に触れた財布を天の与えと押しいただき、千崎に届けようと後を追った。

## 《六段目》

勘平が家に帰ると、祇園町から一文字才兵衛がおかるを迎えに来ていた。自分のために遊女となる女房と両親の志を有難く思ったが、舅の与市兵衛はまだ帰らず、その時借りたという財布が、昨夜の旅人のもと同じなので勘平は苦悶した。おかるは別れを惜しんで連れて行かれる。(身売りの段)

そこへ獵人仲間が与市兵衛の死骸をかつぎこんできた。勘平が驚く様子もないので、もしやと思い、母は色々尋ね、懐に手を入れると、血の付いた財布が出る。勘平は返す言葉もなく畳に伏して泣いた。そこへ原郷右衛門と千崎弥五郎が、主君に不忠をした者の金は使えないと、石塔料を返しに来た。母は天罰であると二人に舅殺しを訴えた。たまりかねた勘平は腹に刀を突き立て、ゆうべの事情を物語る。しかし、死骸を調べると鉄砲傷はなく、結果的に勘平は定九郎を撃って、親の仇討ちをしたことがわかる。勘平は徒党の連判に加えられ、血判して息絶える。

## 《七段目》 一力茶屋の段

大星由良之助は祇園の一角で遊蕩に耽っていた。血気の若侍が煽つても、足輕の寺岡平右衛門がお供にと嘆願しても、全く他愛なく酔いつぶれている。そこへ由良之助の息子・力弥が、判官の妻・顔世からの密書を届けに来る。あたりを見回して密書を読んでいると、縁の下からは九太夫が、二階からは、おかるが盗み読んでいた。由良之助はそれに気づき、おかるの身請け話をきめる。そこへおかるの兄平右衛門が来合わせ、おかるの話聞くうちに由良之助の真意を悟り、手紙を盗み読んだ科によっておかるを斬り、それを手柄に連判に加わろうとする。おかるは兄の口から、父・与市兵衛と、夫・勘平の死を聞かされ、命はいらぬと覚悟したところへ、由良之助があらわれ、平右衛門にはお供をすることを許し、おかるには夫に代わり、縁の下の九太夫を討たせる。

## 《八段目》

加古川本蔵の娘・小浪は、由良之助の息子・力弥と許嫁の仲であった。由良之助一家が山科に住んでいること知って、継母・戸無頼と二人きり、供も連れず山科へと旅を続ける。

## 《九段目》

雪の山科、由良之助の閑居へ、戸無頼と小浪が到着する。由良之助の妻・お石は愛想良く出迎えはするが、賄賂を贈るような追従者の娘と、二君に仕えぬ由良之助の大事な子とは釣り合わない、破談を言いわたす。思い余った母娘が死のうとするのをお石は止めて、祝言をさせたければ本蔵の首をと所望する。本蔵が抱きとめたば

かりに、判官は本望を遂げられなかった。その恨みの本蔵の首を婿引出にと迫る。母娘が再び途方にくれる所へ虚無僧姿に身をやつした本蔵が現れ、わざと力弥の手にかかる。本蔵の本心を見ぬいた由良之助に小浪の祝言を頼み、師直屋敷の絵図面を渡して死んでゆく。

### 《十段目》

堺の商人・天河屋義平は、召し使いも女房もよそへ出し、一人で討入りの諸道具を調達している。由良之助は、同士の疑念をはらすため、同士を捕手として入りこませ、義平を糾明するが、頑として明かさない。由良之助はそれを賞して「天河」を討入りの際の合い言葉と決め、鎌倉へと向かう。

### 《十一段目》

一同は、稲村ヶ崎に上陸し、雪の中、鎌倉の師直邸の討入る。由良之助は、判官形見の短剣で師直の首をかき、亡君の位牌に供え、焼香する。一同は、菩提寺光明寺へと引き上げる。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

### 三段目 殿中刃傷の段

脇能過ぎて御樂屋に鼓の調べ太鼓の音、天下泰平繁昌の寿祝ふ直義公、御機嫌なゝめならざりける。若狭助はかねて待つ師直遅しと御殿の内、奥をうかがうふ長袴の紐しめくゝり気配りし、『おのれ師直、真二つ』と刀の鯉息をつめ、待つとも知らぬ師直主従遠目に見付け

「これはく若狭助殿。てきてお早い御登城。イヤハヤ我折りました。我ら閉口々々。いや閉口ついでに貴殿に言訳いたし、お詫び申すことがある」

と、両腰ぐはらりと投げ出し

「若狭助殿、改めて申さねばならぬ一通り。いつぞや鶴が岡で拙者が申した過言、ヲ、お腹が立つたである

う。もつともぢやく、がそこをお詫び。その時はど

うやらした詞の違ひでつい申した、我ら一生の粗忽。

武士がコレ手をさげる。真平く。仮令そのものが物

馴れたお人なりやくこそ、外ほかの狼狽者うろたえもので見さつしや

れ、この師直真二つ、ヲ、こわやく。ありやうが

この節貴殿のうしろ影手を合わして拝みました。ア、

年寄るとやくたいく。年に免じて御免々々。これさ

く武士が刀を投げ出し手を合はず。これほどに申す

のを聞き入れぬ貴公でもないわさ。とかく幾重にも誤

りく。コレサ珍才ともどもにお詫びく」

と、金が言はする追従とは夢にも知らぬ若狭助。力み

し腕も拍子抜け。いまさら抜くに抜かれもせず。寝刃

合はせし刀の手前、さしうつむきし思案顔。小柴の蔭

には本蔵が瞬きもせず守り居る。

「ナニ珍才、この塩谷はなぜ遅い。若狭助殿とはきつい違ひ。扱々不行儀者。いまにおいて面出しせぬ。主が主なれば家老で候として諸事に細心のつく奴が一人もない。いざ〜若狭殿、御前へお供いたそ。サアお立ちなされ〜。コレサ師直めあやまつてをるぞ。コリヤこゝな粹め〜粹様め」

「イヤ若狭助最前からちと心悪うござる。マア先へ」  
「何とした〜、腹痛か。コレサ珍才、お背中〜。」

お菓進ぜうかな」

「イヤ〜それほどにもござらぬ」

「然らば少しの内おくつろぎ。御前の首尾は我らがよいやうに申し上ぐる。ソレ珍才一間へ御供申せ」

と、主従寄つてお手車に、迷惑ながら若狭助『これは』と思へど、是非なくも奥の一間へ入りければ『ア、もう楽ぢや』と本蔵は天を拝し、お次の間にぞ控へ居る。

ほどもあらず塩谷判官。御前へ通る長廊下。師直呼びかけ

「遅し〜。なんと心得てござる。今日は正七ツ時と先刻から申し渡したでないか」

「なるほど遅なはりしは不調法。さりながら御前へ出るはまだ間もあらん」

と、袂より文箱取り出し

「最前手前の家来が貴公へお渡し申しくれよ、すなはち奥顔世方より参りし」

と、渡せば、受取り

「成程々々。イヤそこもとの御内方は扱々心がけがござるわ。手前が和歌の道に心を寄するを聞き、添削を頼むとある。定めてそのことならん」

と押しひらき

「さなきだに重きが上の小夜衣さよしろも、わがつまならぬつま



な重ねそ。ハアこれは新古今の歌。この古歌に添削とはム、ム、」

と思案の内、『わが恋のかなはぬしるし。さては夫に打ち明けし』と思ふ怒りをさあらぬ顔

「判官殿、この歌ご覧じたでござらう」

「イヤたゞいま見ました」

「ム、手前が読むのを、ア、貴殿の奥方はきつい貞女でござる。ちよつと遣はさるゝ歌がこれぢや。つまならぬつまな重ねそ。ア、貞女々々。そのもとはあやかり者。登城も遅なはる筈のこと。家にばかりへばりついでござるによつて、御前の方はお構ひないぢや」

と、あてこする雑言過言。あちらの喧嘩の門違ひとは判官さらに合点ゆかず、むつとせしが押し鎮め

「ハ、ハ、ハ、これは――師直殿には御酒機嫌か、御酒参つたの」

「いつ盛らしやつた。イヤサいつ呑みました。御酒下されても呑まいでも勤むるところはきつと勤むる。貴

公はなぜ遅かつたの。御酒参つたか。イヤサ内にへば

りついでござつたか。貴殿より若狭助殿ア、格別勤め

られます。イヤまたそのもとの奥方は貞女といひ御器

量と申し、手跡は見事。御自慢なされ。むつとな

されな、嘘ではないはさ。今日御前にはお取込み。手

前とても同然。その中へ鼻毛らしい、イヤこれは手前

が奥で歌でござる。それほど内が大切なら御出御無用。

総体貴様のやうな、内にばかり居る者を井戸の鮎みなぢや

といふ譬たとへがある。後学のため聞いておかつせ。かの

鮎あなめがわづか三尺か四尺の井の中を、天にも地にもな

いやうに思ふて、ふだん外を見る事がない。ところに

かの井戸替へに釣瓶について上ります。それを川へ放

ちやると、なにが内にばかり居る奴ぢやによつて喜ん

で途を失ひ、あちらへはうろくこちらへはうろく、

しまいには橋杭で鼻をうつてぴりくくと死にます

る。かの鮒めが。貴様も丁度その鮒と同じことだ。鮒

よ鮒よ、鮒だく、鮒武士だ」

「フウム」

「殿中だ」

「ハアくくくハハア」

「ハハハハハ」

と出放題。判官腹に据えかね

「こりやこなた狂気召さつたか。イヤサ気がちがふた

か師直」

「シヤこいつ武士をとらへて気違ひとは。出頭第一の

高師直」

「ム、すりや今の悪言は本性よな」

「くどいくわい、ガまた本性ならどうする」

「ム、本性ならば」

「本性ならば」

「オ、かうする」

と抜討ちに真向へ切りつくる眉間の大傷。『これは』と

沈む身のかはし、烏帽子の頭二つに切り、また切りかゝ

るを抜けつくぐりつ逃げ廻る折もあれ、お次に控へし

本蔵走り出て押しとゞめ

「コレ判官様御短慮」

と抱きとむるその隙に、師直は館をさしてこけつ転び

つ逃げ行けば

「おのれ師直真二つ。放せ本蔵放しやれ」

と、せり合ふ内、館も俄に騒ぎ出し、家中の諸武士、

大名小名押さへて刀もぎとるやら。師直を介抱やら、

上を下へと

## 四段目 判官切腹の段

浮世なれ。

塩谷判官閑居によつて、扇ヶ谷の上屋敷。大竹にて門戸を閉じ、家中の外は出入を留め、事嚴重に見へにけり。

『はや御上使の御出で』と玄關広間ひしめけば、奥へかくと通じさせ、御台所も座を下り、皆々

出迎ふ間もなく、入り来る上使は石堂右馬丞いしどうまのじょう、師直が

昵じしん近薬師寺次郎左衛門『役目ならば罷り通る』と会釈

もなく上座につけば、一間の内より塩谷判官しづくと立ち出で

「これは／＼御上使とあつて石堂殿、御苦勞千万。まづお盃の用意せよ、御上使の趣承り、いづれもと一献酌み積つみ爵を晴らし申さん」

「ヲ、それようござろ。薬師寺もお相手致さふ。したが上意を聞かれたら酒も喉へは通るまい」

と嘲笑へば、右馬丞

「我々今日上使に立つたるその趣、つぶさに承知せられよ」

と、懷中より御書取り出し、押開けば、判官も積を改め承るその文言

「このたび塩谷判官高定。私の宿意を以て執事高師直を刃傷に及び、館を騒がせし科によつて、国郡を没収し、切腹申し付くるものなり」

聞くよりはつと驚く御台、並み居る諸士も顔見合せ、あきれはてたるばかりなり。判官動ずる気色もなく

「御上意の趣、意細承知仕る。さてこれからは各々の御苦勞休めに打ちくつろいで御酒一つ」

「コレ／＼判官黙り召され、その方が今度の科は縛り

首にも及ぶべきところ、お上の慈悲をもつて、切腹仰せつけらるゝをありがたう思ひ、早速用意もすべき筈。殊にもつて切腹には定つた法のあるもの。それになんぞや、当世様の長羽織、ぞべらくとしらるゝは酒興か。たゞし血迷うたか。上使に立つたる石堂殿、この薬師寺へ不作法」

と極め付くれば、につこと笑ひ

「この判官酒興もせず、血迷ひもせぬ。今日上使と聞くよりも、かくあらんと期したる故、かねての覚悟見すべし」

と、大小羽織を脱ぎ捨つれば、下には用意の白小袖、無紋の袴、死装束、皆々これと驚けば、薬師寺は言句も出でず、顔ふくらしして閉口す。右馬丞さし寄つて「御心底察し入る。即ち拙者検使の役、心静かに御覚

悟」

「ハ、ア御親切かたじけなし。刃傷に及びしより、かくあらんとはかねての覚悟。恨むらくは館にて、加古川本蔵に抱き留められ、師直を討ちもらし、無念骨髄に通つて忘れがたし」

と、怒りの声と諸共に、お次の襖打ちたゞき

「一家中の者ども、殿の御存生ぞんじょうに御尊顔を拝したき願ひ。御前へ推参致さんや。郷右衛門殿お取次、郷右衛

門殿お取次」

と、家中の声々聞ゆれば、郷右衛門、御前に向ひ

「いかが計らひ候はん」

「ムウ尤もなる願ひなれども、由良助が参るまで無用々々」

はつとばかりに一間に向ひ

「聞かるゝ通りの御意なれば、一人も叶はぬ」

諸士は返す詞もなく、一間もひつそと静まりける。力

弥御意を承り、かねて用意の切腹刀、御前に直すれば、

心静かに肩衣取り除け座をくつろげ

「力弥、々々」

「ハツく」

「由良助は」

「いまだ参上仕りませぬ」

「存生に對面せで残念。ハテ残り多やな。コレく御

檢使。御見届け下さるべし」

と、三宝引き寄せ九寸五分押し頂き

「力弥、々々」

「ハツく」

「由良助は」

「いまだ参上つかまつりませぬ」

「是非に及ばぬ。これまで」

と、刀逆手に取り直し、弓手に突き立て引廻す。御台

二た目と見もやらず、口に称名、目に涙。廊下の襖

踏みひらき、駆け込む大星由良助。主君のありさま見

るよりも

「ハツくくハア」

とばかりにどうと伏す。後に続いて千崎、矢間、その

ほかの一家中ばらくと駆け入つたり。

「国家老大星由良助、たゞいま到着仕りました」

「ナニ由良助とな。最期の對面苦しくない。近う」

「ハツ」

「近う」

「ハ」

「近う、く、く」

「ハツくく」

「ヤレ由良助、待ちかねたわいやい」

「ハ、ア、御存生の御尊顔を拝し、身にとつて何程か」

「ヲ、我も満足々々。定めて仔細聞いたであらう。聞いたか〜。エ、無念。口惜しいわやい」

「ハ、ア委細、承知仕る。この期に及び申上ぐる詞もなし。たゞ御最期の尋常を願はしう存じまする」

「ヲ、言ふにや及ぶ」

と諸手をかけ、ぐつ〜と引廻し、苦しき息をほつとつぎ

「由良助、この九寸五分は汝へ形見。我が鬱憤を晴らさせよ」

と、切つ先にて笛刎ね切り、血刀投げ出しうつ伏せに、  
どうぞ転び、息絶ゆれば、御台を始め、並み居る家中、  
眼を閉じ息をつめ、齒を食ひしぱり控ゆれば、由良助  
にじり寄り、刀取り上げ押し戴き、血に染まる切つ先  
を打守り〜、拳を握り、無念の涙はら〜。判  
官の末期まつしの一句、五臓六腑に沁みわたり、さてこそ末

世に大星が忠臣義心の名を上げし根ざしはかくと知られけり

## 八段目 道行旅路の嫁入

浮世とは誰がいひ初めて飛鳥川。ふちも知行も瀬と

かはり、よるべも浪の下人に、結ぶ塩谷の誤りは、恋

のかせ杭加古川の、娘小浪が許婚結納も取らずその

ままに振り捨てられし物思ひ。母の思ひは山科の婿の

力弥を力にて、住家へ押して嫁入りも、世にありなし

の義理遠慮。腰元連れず乗物もやめて親子の二人連れ。

都の空に志す、雪の肌へも寒空は、寒紅梅の色添ひて、

手先覚へず凍え坂。薩垂峠にさしかかり、見返れば富

士の煙の空に消へ、行方も知れぬ思ひをば、晴らす嫁

入の門火ぞと、祝ふて三保の松原につづく、並松街道

を狭しと打つたる行列は誰と知らねどうらやまし。

ア、世が世ならあの如く、一度の晴と花かざり、伊達

を駿河の府中過ぎ。城下過ぐれば気散じに

母の心もいそぐと、二世の盃済んで後、閨の睦言  
私言、親知らず子知らずと鶯の細道縫れ合ひ、男松の

肌にひつたりと締めて固めし新枕。女夫が中の若緑、

抱いて寝松の千代掛けて、変るまいぞの睦言は嬉しか

らうとほのめけば、

アノ母様の差合ひを脇へこかして鞆子川。宇津の山辺

の現にも、夢にも早う大井川、水の流れと人心、都

の花に比ぶれば、日蔭の紅葉色づいて、つひ秋が来て

小男鹿の夫故ならば朝夕に辛苦するものなんのその。

この手柏のうら若き二人が中にやや産んで、ねん／＼

ころ／＼や、ねんねが守はどこへ往た、どことは知れ

たその人に逢ふて恨みをなんとまあ、どう言ふてよか

らうと、辛氣島田の憂さ晴らし。

我が身の上を。かくとだに、人白須賀の橋越へて行け

ば吉田や赤坂の、招く女の声揃へ

へ縁を結ばば、清水寺へ参らんせ。音羽の滝にざんぶりざ、毎日さう言ふて拜まんせ、さうじやいな、紫色ししき

雁がんこう高我開令入給。神樂太鼓にヨイコノエイ、こちらの昼

寝を覚まされた。都殿御に逢ふて辛さが語りたや。ソ

ウトモく。もしも女夫とかゝ様ならば伊勢さんの引

きはせ。

鄙ひなびた唄も身にとりて、よい吉相に鳴海湯。熱田の社

あれかとよ。七里の渡し帆を上げて、艚拍子揃へてヤ

ツシツシ。舵取る音は。鈴虫かいや、きりぎりすなく

や霜夜と詠みたるは、小夜更けてこそ暮れ迄と、限り

ある船急がんと母が走れば、娘も走り、空の霰に笠覆

ひ船路の友の後や先。庄野亀山せきとむる伊勢と吾妻

の別れ道。駅路の鈴の鈴鹿越え、間の土山雨が降る。あい

水口の端に言ひ囃す石部石場で大石や、小石拾ふて、みなくち

我が夫と撫でつきすりつ手に据ゑて、やがて大津や三井寺の麓を越えて山科へ程なき、里へ